
歴博国際シンポジウム 「過去1万年間の陸域環境の変遷と自然災害史」

REKIHAKU International Symposium: Terrestrial Environmental Changes and Natural Disasters during the Last 10,000 Years

辻 誠一郎

【要旨】 歴博国際シンポジウム「過去1万年間の陸域環境の変遷と自然災害史」は、文部省が推進するCOE中核的研究機関支援プログラムの一つである国際シンポジウムとして、1997（平成9）年11月25日～11月28日の4日間、国立歴史民俗博物館において開催された。このシンポジウムは、環境変動に深くかかわり、また生態系をかたちづくるさまざまな構成要素に見られる個別の現象を、乾燥から湿潤地域へと地域ごとに総合的に捉え直し、かつ地域を縦断的・広域的に捉え直すことで、個別の現象の環境変動史における位置づけをはかり、より広域的・総合的視点と新しい研究方法を育むとともに、これからの国際的視野に立った研究の推進、たとえば国際共同研究・調査のありかたや具体的な推進方法を模索することを目的とした。このシンポジウムでは、方法論についてはできるだけ地球規模で検討することにし、日本を含む湿潤地帯から乾燥地帯にかけての縦断的・広域的な現象論については、中国から日本を中心にした東アジアを取り上げた。

シンポジウムは4つのオーラル・セッション、ポスター・セッション、公開講演、レセプションから構成された。セッション1「歴史時代の環境変遷」では、過去約1,000年間の気温と乾・湿度を中心とした地球規模から東アジア、そして日本における気候変動が議論された。研究の方法として、日記類などの古記録、樹木年輪の生理・生態学的解析などが用いられ、これまでにない高い分解能をもつ解析方法が提唱された。セッション2「アジア大陸内部から沿岸域にかけての完新世の環境変遷」では、テンシャン山脈、クンルン山脈、ジュンガル盆地、タクラマカン沙漠、長江中流域、長江デルタ・太湖における更新世末期から完新世の環境変化が議論された。セッション3「日本列島と周辺域における環境変遷」では、北部九州、濃尾平野、関東平野など日本の主要な海岸平野の発達史と環境変化、動物・植物資源と人間活動のかかわり史が議論された。セッション4「環境史の高精度編年」では、これまでの編年の問題点、高精度のタンデム加速器質量分析法（AMS）を用いた数十年から数百年オーダーの環境史編年の可能性と問題点、放射性炭素年代以外の高精度編年の開発について議論された。

1. はじめに

歴博国際シンポジウム「過去1万年間の陸域環境の変遷と自然災害史」は、文部省が推進するCOE中核的研究機関支援プログラムの一つである国際シンポジウムとして開催計画が採択され、1997（平成9）年11月25日～11月28日の4日間、国立歴史民俗博物館を会場として開催された。COE中核的研究機関支援プログラムは1995（平成7）年度から始まったが、国立歴史民俗博物館としては1997（平成9）年度開催の本シンポジウムが初めてのものである。

このシンポジウムは、日本歴史における人間と環境や災害とのかかわりの歴史についての研究の必要性が指摘される中で、検討対象となる環境の基本の一つである自然現象および自然災害を中心に取り上げ、また、人間活動が活発化する縄文時代以降、すなわち環境変遷史上の完新世、言い換